



そして認知症の状態にある方が「帰りたい」と言われたときに話をよく聞いてみると、そのほとんどが「帰る理由」を語っています。

「娘が仕事から帰ってくる。夕飯の支度をしなぐちゃいけないから帰る」と言う林田さん（仮名）。「そりゃあ、ここにいる場合じゃないよね」なのです。

テレビの天気予報でこれから雨が降ることを知り、「雨が降ってくるそうだから、家に帰って布団をとりこまないと」と言う鈴木さん（仮名）。「布団が濡れたら大変だ。そりゃあ帰らないとね」なのです。

このように、「家に帰る」理由をよく聞くと、「そのとおり」と言えることが多々あります。そして多くの方が「ここは家じゃないことがわかってる」。その上で帰りたい理由は「ここにいる意味や目的が実感できなくなったから帰る」場合がほとんどです。

「ここにいる意味」をつくるケア ——実感が人を落ち着かせる

人はそもそも、「我が家」を暮らしの拠点にしています。そして「我が家」を出るときは「意味や目的」を持って外に出ます。

日本は、お金と物・事を交換する社会なので、生活を営む上で必要不可欠なものの調達は「我が家の中（内）」では満たせません。だから、我が家の外へと行動します。食材料、生活用品、衣類、家電、家具など生活に必要なもののほと

んどを、我が家を出て調達行動を取り、手に入れます。飲食や余暇活動といった「事」も同様です。

また、我が家から定期的に外に出ることの中心に「仕事」があるでしょう。仕事に出る意味や目的の主たるところは「お金を得る」ことですから、お金と物・事を交換する社会である我が国において、これは理屈に合っています。

意味や目的を成すために外に出る。そして、意味や目的が終わると帰る。

ということは、グループホームの入居者さんは、「我が家ではないグループホームにいる」との意味や目的が実感できなければ帰るのは当たり前」ということです。となると、「帰る」という入居者さんがいらっしゃる場合、ここにいることの意味や目的を実感できるような支援があるかが大切になってきます。

ちなみに、「家に帰る」と言われる入居者の方でも、食事中に「帰る」とは言いません。「これ美味しいなあ。家に帰ろう」と言いながら食べている人に僕は出会ったことはありません。お風呂に入っているときも「帰りたい」とは言いません。食事中、お風呂に入っている、どちらも今ここにいる意味や目的が実感できているからです。

なので、食事の後、入浴の後などに「帰る」と言われることが圧倒的に多いのです。

ちなみに僕ら認知症の状態にない人たちは

「実感」がなくても、そこにいられます。

「今日は夕方の5時まで帰れないよ」と言われたら、5時まで家に帰れないことを「脳に教えて維持できる」からです。ですが、認知症の状態にある方たちは情報を脳に維持ができないので、ここにいることの意味や目的を「実感できる」ことが大事なのです。

高田さんにここにいることの意味や目的を実感していただく支援のひとつが、晩酌用の日本酒を買いに行き、夕食時に晩酌すること。「この後晩酌するから・今晚酌しているから・帰るのは明日にする」と。

ちなみに高田さんは、ほぼ毎日、夕食の買物に他の入居者さんと職員と出掛け、その際に晩酌用の日本酒を買いいます。

「高田さん、せっかくだから大きな1ℓパックの日本酒を買ったらどうですか？」と職員がいくら声をかけても、高田さんは毎日「いや、明日には帰るから、このカップ酒でいいよ」と答え、カップ入りの日本酒に手を伸ばしていました。

「明日帰るんだから」

高田さんの選択の方が正しいですよね（笑）。

